

「鎮魂の歌」の歌詞はこうして誕生した

— 作詞者：千葉隆男さんの手紙 —

3月2日、IBC 岩手放送のテレビ出演の要請があり、「鎮魂の歌」を世界に向けて・・・という内容で作曲者の太田代政男さん、ピアニストの池田さんの三人で出演した時のことです。

生放送中、アナウンサーに「鎮魂の歌」を制作した思いを聞かれた太田代さんは「作詞者の千葉隆男さんは釜石の方で・・・」という出だしで、「鎮魂の歌」に対する思いを語ったのです。その時、初めて、作詞者が釜石在住で震災を体験された方、ということを知りました。



私は、すぐ千葉さんの連絡先を調べ電話でご挨拶をさせていただきました。柔らかく穏やかな声で、震災当時の事を話してくださいました。

私はお会いしてご挨拶をしたいと思い、釜石市唐丹町盛岩寺で計画中の「鎮魂の歌の集い」にお誘いしましたが、先約があって出席する事ができないというお返事を頂きました。

「唐丹町で演奏ですか？」と聞きなおされたので「はい、そうです。釜石市内ですから盛岩寺はご存知ですよね。」「勿論です。実は、私の初任校は唐丹町でした。」と話す声で、私と千葉隆男さんの距離が急に短くなった気持ちになりました。3月7日、千葉隆男さんから私宛に1通の手紙が届きました。ここにご紹介させていただきます。

前略、3月5日、お手紙を頂戴しました。

満2年を目前にする東日本大震災。

岩手の公立学校退職校長会で取り組んだ「鎮魂の歌」が犠牲者の御霊に届けられ、世人の生きる力になって頂けたら有難いことです。

さて、釜石の退職校長会では毎年「碧海」という機関誌を発行していますが、私は、今年度「愛展務」という表題で載せていただきました。

「追記」には鎮魂の歌を綴った経緯をまとめています。

目を通していただければ有難いです。

千葉 隆男

「愛展務」

釜石退職校長会 機関誌「碧海」より抜粋

千葉隆男

(岩手県釜石市甲子町在住)

題名の「愛展務」は「あいてむ」と読む。しかし、漢和辞典にはない。私が勝手に造った熟語だから。

元々は、英語であるから片仮名で表記しなければならないのであるが、耳にした時の強烈な刺激が脳裏に刻み込まれ、「私の日本語」というべき言葉に加わってしまったのである。

昨、平成23年3月11日。未曾有の被害をもたらした地震と津波による「東日本大震災」。忘れようとしても忘れることのできない大災害が起きた日である。

当日の地震発生時、大渡町のある所での集会に参加していた私が、もし避難の行動をためらっていたら津波に飲み込まれていたかもしれなかったのである。

大渡橋、釜石駅前、そして、五の橋をわたりきるまでと急いで歩いたが、何度も立ち止らなければならぬほどの大揺れがあり、釜石駅前では、市内に進行しようとする車両を多人数の警察官が停めていて、緊迫した状況であることが判った。幸いにも、中妻町でタクシーを拾うことができ、無事、家に帰ることができたのであった。

寒く、電灯も点らず、電話も通じない状況のなかで、釜石をはじめ数多くの町や村が壊滅的被害に遭ったことを知ったのは辺りが暗くなるころであった。それは、町内会の集会所に大勢の人たちが避難してきたので寝具や衣類の提供を願う、との呼びかけを聞いたからである。急いで、夜具や衣類などを取りまとめて届けたり、翌日には地区集会所での炊き出しにも足を運んだ。

それからの数日は、被災した町並みをぬいながら各所に設けられた避難所を探し歩き、親類や知人の安否確認のための行動を起こしたのであった。宮城や福島に住む親戚には、臨時電話が開設されたという情報を得て、中妻のNTT局に二日間通い、長い列の待ち人に加わって安全を確かめたりもした。



あの日から、一年以上も経っているが、被災した人々の暮らしや気持ちはいかばかりかと思うと、今も、心が痛むのである。命を失った人々の霊が安らかなることと、以前にも増して住みよい街の実現を祈るのである。

さて、「愛展務」についてである。

被災から三ヶ月を経た五月。剃髪した作務衣姿の僧職の人が、被災地に支援物資を届けている報道をテレビのニュース番組でみていたときのことである。

積荷をトラックから下ろしている場で、何を届けに来たのかという趣旨の報道員の質問に、「化粧品です」と答え、「食料も衣類も大切。しかし、われわれの生活に必要なアイテムは百も二百もあるんです。」と作業の手も休めずに語るのであった。その、「必要なアイテム」との言葉に、「はっ。」とさせられるのであった。

被災した親戚や知人を見舞ったり、寝具や衣類を届けたり炊き出しにも参加したりして、充分ではないまでも自分のできることは行動に表してきたつもりになっていたときだけに、この僧職の人の言葉は、大げさに言えば「読経」より強くつよく心に響いたのである。

早速、「アイテム」を辞書で確かめてみた。スペルは i・t・e・m。意味は「品物・小道具・雑貨」とあった。

今日、封書を鋏を使って開封したのであるが、鋏にもいろいろあることに想いを馳せた。紙や布を切る場合に使う鋏のほか、花切り、野菜切り、散髪、そして医療の手術に使うものなど、いろいろな用途に応じたものがある。私には鼻毛切り鋏も必要である。

何気なく過ごしている暮らしの中に、正に、限りがないほどの「小物」の在ることに、改めて気づいたのである。それらを含め瞬時にして失ってしまった人々の気持ちを深く知ることはできずとも、大変なこと、と受けとめることができる。長年にわたり生活必需品として備えて使ってきた一切を「無」にしてしまったのだから。

そういえば、家屋を流失し家族を亡くしてしまった知己の女性が、被災後間もなく我が家を訪ねてきてくれた。そのときは、「あの人か？」と見間違えるほどの痛々しい顔貌であったが、最近は薄化粧をした姿を見せ、元気を取り戻してきていることを察知することができる。

そんなことから、「小道具」とか「雑貨」と言うよりも「アイテム」と呼ぶ方が相応しいと感じたのである。そして、我流日本語にするために意味をもつ漢字を当てはめてみたところ、「愛・展・務」の三文字熟語がうまれたのである。

「愛展務」の「愛」は、喜びとか幸せとか潤いの意味、「展」は拡がり、そして、「務」は役割り、という内容をもつ文字である。言うなれば、日常の潤いのある生活に欠かすことのできない品々、とでもなるであろうか。

平凡な暮らしをしている私でも、数多くの「愛展務」によって生活が支えられていることに想いが及び、その品々の陰には作り上げた人々の働きがあることにも改めて気づかされたのである。

「私」を「物」に置き換えて、考えてみた。体力も知力も衰えを感じ、非生活者的存在に進行中であることを自覚しながらも、「世の中の、小さなアイテムであるのでは、いや、そうありたい。」と思うと、生きていくことに嬉しさを覚えるのである。明日への力が湧いてくるのである。

追記・・・

「鎮魂の歌」をつくる。

三月に受けとった県退職校長会の文書で、東日本大震災に係る「鎮魂・復興の祈りの歌」の募集を知った。

当初は気にも留めないでいたのであるが、雪混じりの寒風が吹く日のウォーキング中に、ふと、「あなたは、今どう思っているのですか」という囁き声とも思える言葉を耳にしたように感じたのである。ウォーキングコースには、地震によって崩落した道路の修復工事をしている所があり、初めのころは作業している人たちに挨拶をして通り過ぎていたものであるが、やがて話を交わすようになった。中でも、他所の人と思われる口調の主任の人との会話では、工事の事や津波のことが話題であった。



そのためか、親戚や知人や教え子など、両手の指で数えきれないほどの犠牲となった人々の顔が次々と浮かんで、在りし日のことが思い出されたのである。

バスの中で亡くなった人は、大揺れがあったときには同じ場所にいたのだった。また震災から半年経った九月に執り行われた福島の子供の親戚の老夫婦の葬儀のことや、未だ行方が判らずにいる知人たちにも想いが及んで、改めて、悲しみを深くしたのである。

そんなことから、拙いまでも自分の気持ちを歌にまとめてみようとの気持ちが深まり、手がけてみたのである。

犠牲になられた人たちのことはもちろんのこと、街並みの被災の様子を見たり聞いたりするたびに、「ああー、」という嘆息が漏れだすことに気づき、書き出しを「ああ 山揺れて 海騒ぐ日」としてペンを走らせた。

二番は復興への思い、三番は震災を語り継ぐ気持ちを綴り、御霊の安らかなることを祈る内容とした。

少し硬い表現になったが、作り了えたとき、ウオーキング中に聞こえたあの囁き声に応えることができた気持ちになり、ほっとしたのである。

津波のとき、「てんでんこ」という避難の教訓もあるが40年も前に白山小学校の二年を担任したときのSさんは脚の不自由なおばあさん（母親）を避難させなければ、と職場から家に戻ったとき津波に飲み込まれたとのこと。その母親は、近所の人たちの助けを得て安全な場所に移動していたという。

背順による整列時には先頭で、いつも、くりくりした目を輝かせていたSさんの顔が険にうかんだり、残された母親の気持ちに想いを馳せると、悲しみが再び寄せてくるのである。

犠牲者の御霊に捧げようと、我流の節まわしで口ずさんでいたのであるが、有難いことに、専門家の手によって曲づけされることになった。



（挿入写真：3月13日岩手県唐丹町盛岩寺で行われた「一日も早い復興を願って歌う“鎮魂の歌”」の演奏風景）

とうに 「唐丹希望基金 2013」設立

—世界に目を向けて進もう！—

2012年度も終わろうとしております。

なのに、東日本大震災で甚大な被害を被った、青森県から福島県の太平洋沿岸部は瓦礫は減りつつも、更地に家々の土台のみが残る荒涼とした景色がどこまでも続きます。

「未来の日本を背負う子ども達に寄り添った行動をしたい」という気持ちは失せることはありません。

そこでEECは昨年引き続き、子供たちの「長い人生を生きぬくために、大切な学び」を応援する「唐丹希望基金 2013」を下記の通り設立します。

皆様に、積極的に支援者となって下さる事を期待すると共に、一緒に支援の輪を世界に向かって広げる行動を起こしていただきたいと思っております。

唐丹中学校の女子生徒の一人が「負けない。負けてはいられない！」とメッセージをくれました。

今年も多くの仲間と共に、同じ気持ちで子ども達に寄り添って歩みます。

記

1 活動名称 「唐丹希望基金 2013」

2 期 間 平成 25 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日。

3 支援対象 唐丹小中学生 113 名。山田尊喜ちゃん。

4 活動内容 ① 児童、生徒の教育支援。

② 「唐丹小中学生と支援者の集い」実施。（「唐丹サンタルチア祭」12月13日）

③ 山田尊喜ちゃんの医療支援。

④ 「鎮魂の歌を歌おう」参加者 10,000 人を募る運動。

5 広 報 毎月末発行の活動報告「EEC 通信」に募金者名、応援メッセージ等を掲載。

EEC 通信他、活動の一切をホームページで公開。<http://www10.plala.or.jp/yasnoli/>

6 募金収支報告 年 2 回（9 月末、平成 26 年 3 月末）

7 支援金振込先 郵便口座 記号：18390 番号：13087781 高館千枝子宛

8 問い合わせ先 岩手県紫波郡矢巾町西徳田 7 - 7 高館千枝子

Mail:tchieko@cocoa.ocn.ne.jp /Tel : 019 - 697 - 3851

【3月1日から3月31日までの支援者 40名 通帳記帳通りの表記で記載】

伊藤富美子、松岡喜美子、右原君江、齋 巖、高館千枝子、埼玉県匿名、山本和子、千葉県立野田高等学校定時制 12 期卒業生 17 名、相田弥生、横浜少年少女合唱団代表：島田桂子、横浜山下公園氷川丸前「鎮魂の歌を歌おう・演奏会」募金、村山代利子、内山武、高木健一、青山徹、青山充子、岩崎由紀子、黒岩百合子、堀泰雄、堀玉江、町田浩子、橋口成幸、井上和枝

- 【支援金振込み先】◇郵便口座 記号：18390 番号：13087781 高館千枝子宛
◇4月から「唐丹希望基金 2013」として3年目の支援活動を行います。
皆様の暖かい支援をよろしくお願ひします。
◇「唐丹希望基金 2012」会計報告書は4月にHPにて公表します。

— お知らせ —

① 唐丹町への支援物資送り先

★〒026-0121 岩手県釜石市唐丹町花露辺 127-2 下村恵寿 (TEL：0193-55-3031)

★〒026-0121 岩手県釜石市唐丹町大石字向 54 大石仮設住宅 1-1 大向惣三 (TEL：090 2367 6084)

③「鎮魂の歌追悼演奏会」の報告

日本各地・世界各国からメッセージ募集



「鎮魂の歌」は 2013 年 2 月中旬～3 月まで国内外 17 会場で歌われ、2822 名の参加登録でした。

皆様は震災 2 周年の 3 月 11 日をどのような気持ちでお過ごしになったでしょうか？

震災によって人生の歯車が狂い、辛く、苦しい生活を強いられておられる方が沢いるということを忘れない行動を

【横浜少年少女合唱団による〈海に向かって歌う“鎮魂の歌”〉2013・3・9】 しよう と誓った日でもありました。

4 月から随時、「鎮魂の歌」演奏会場で歌った方、参加者登録して下さった 2822 名の方を中心に、東日本大震災への想いや被災した方達への想いを募集します。

2 月、3 月は東日本大震災 2 周年を思い、「鎮魂の歌」で被災地にエールを送っていただきました。あの時、多くの仲間と声をそろえて歌った時、心の中から生まれた眩きを「唐丹希望基金 2013」本部へ送ってくださいますようお願いいたします。(投稿に写真 1 枚を添えてください。) お待ちしております。

東日本大震災 3 回忌にも同じ気持ちで、今度はもっと仲間を増やして歌うために！

投稿先：「唐丹希望基金 2013」代表 高館 千枝子：tchieko@cocoa.ocn.ne.jp

EEC 東日本大震災教育支援活動

EEC 通信 35 号

2013 年 3 月 31 日